

● アジア各地には、さまざまな「足跡」の遺跡が残されています。例えば、スリランカ南部のスリーパーダにある「聖なる足跡」は、仏教徒、ヒンドゥー教徒、イスラム教徒、そしてキリスト教徒がそれぞれの信仰に基づき聖なる場所として訪れる、まさに宗教間共存の象徴です。

また、イエス・キリストが天に昇られたとされるイスラエルのオリーブ山頂には「昇天教会」があります。この教会がイスラム教徒によって管理されていることは、聖地に対する深い尊重と宗教間の調和を物語っており、その教会にあるイエス様が昇天の際に残されたと伝えられる足跡は、国や宗教の壁を越え、全世界の平和を私たちに強く訴えかけているように思われます。

● イエス様はこの世を去られる前に弟子たちに現れ、「旧約聖書に書かれている事柄が、今まさに実現する」と語り、「父が約束されたもの(すなわち聖霊)をあなたがたに送る」と告げられました。

旧約聖書ゼカリヤ書には、「いつか神の霊が人々に注がれ、彼らは自らが十字架につけた救い主のことを悔いて嘆くようになる」と記されています。これは、人間が神の愛に気づかず救い主を拒んだ現実を示しながらも、やがて聖霊が注がれることで、人々が自らの罪を悔い改め、神の限りない愛と赦しに目覚める時が来るという希望のメッセージです。そして実際に、ペンテコステと呼ばれる日に、弟子たちは聖霊を受け、キリストの愛と赦しを世界に伝える者へと変えられていきました。

● 私たち人間は、自らの不完全さを忘れ、独善的になりがちです。異なる価値観や文化、宗教を相手に押し付け、それが争いや殺し合いにまで発展することさえあります。そのような私たち人間が共存する道は、私たち皆が永遠なる存在である神の前にあっては不完全であり、罪深い存在であることを自覚しつつ、互いに愛し合い、認め合う以外にありません。

● 奈良県の薬師寺には、仏陀の足跡を刻んだ「仏足石」があり、そこには皇族であった文室浄三(ふんやのきよみ)の歌が刻まれています。

御跡(みあと)つくる 石の響きは 天に到り
地さへ揺すれ 父母がために 諸人のために

この歌には、日本の奈良時代に、素朴に神を仰ぎ見て、すべての人々の平和を願った一人の心が込められています。私たちはここに、まさにエキュメニカルな精神を見出すことができます。

私たちもまた、イエス様が互いに平和に生きる世を願って天に昇られたことを心に刻み、その崇高な志を生きる者になりたいと願います。